



認知症に関する県民アンケート調査結果

広島県 健康福祉局 地域共生社会推進課
(令和8年8月)

目的

- 「都道府県認知症施策推進計画」の策定に向け、県民の認知症に対する意識や理解度（認知症観）を把握すること。

実施方法

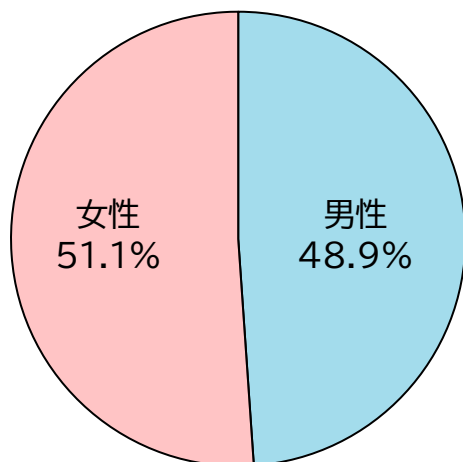
- 対象者：広島県内在住の18歳以上の者
- 回答者数：3,239人
- 調査項目：13問
- 調査方法：インターネット（県民の安心感に関するアンケート調査と一体的に実施）
- 調査期間：令和8年1月16日～1月30日

参考

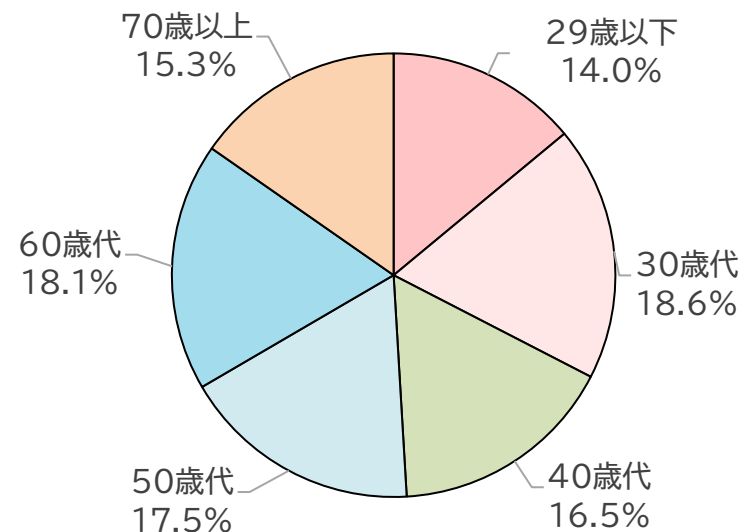
- 内閣府が令和7年8月に実施した「認知症に関する世論調査」の調査項目等を参考に実施

回答者（性別・年代）

性別



年代



■回答者内訳（人数）

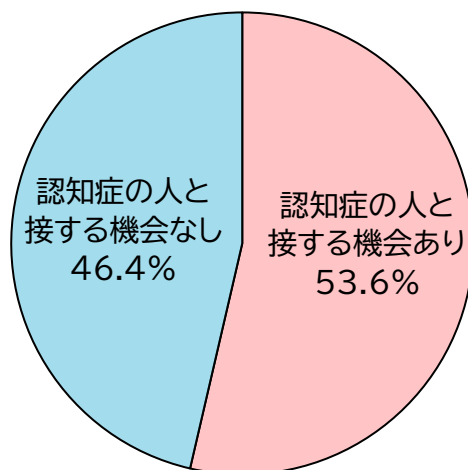
		年齢区分						計
		29歳以下	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	
性別	男性	136	312	265	282	294	295	1,584
	女性	317	290	269	286	292	201	1,655
計		453	602	534	568	586	496	3,239

調査項目

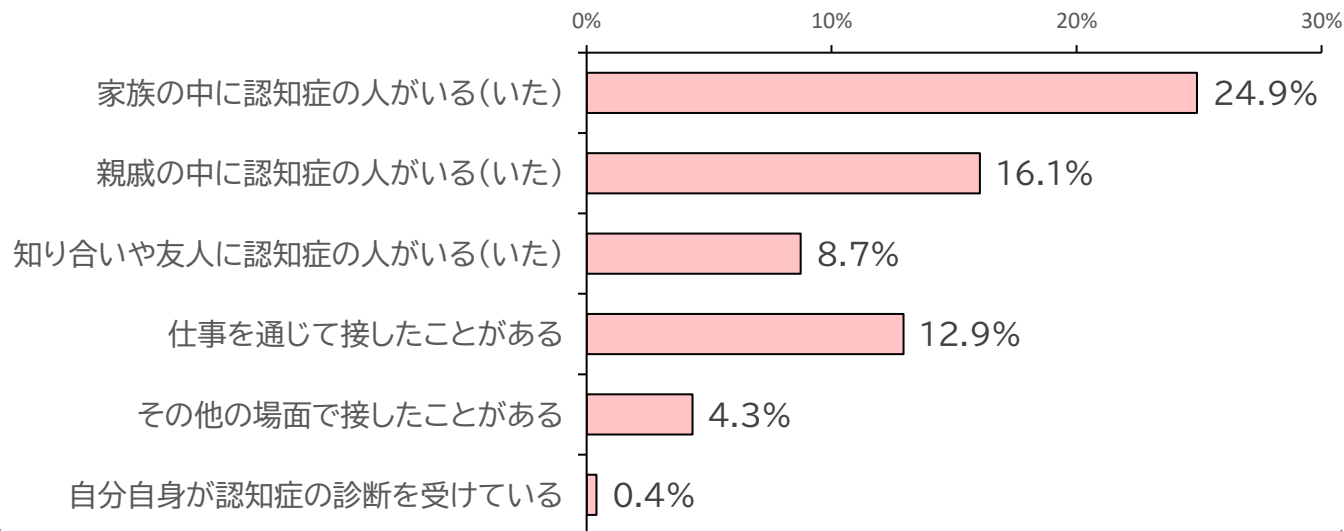
設問	内容
問1	今までに認知症の人と接したことがありますか。
問2	認知症に対してどのようなイメージを持っていますか。
問3	もし、あなたが認知症になったとしたら、どのように暮らしたいと思いますか。
問4	もし、あなたが認知症になったとしたら、どのようなことに不安を感じると思いますか。
問5	認知症になっても地域で安心して暮らすためには、何が重要だと思いますか。
問6	次の言葉について、あてはまるものを選択してください。
問7	認知症は誰にでもなり得ることを知っていますか。
問8	世の中に認知症を理由とした偏見や差別はあると思いますか。
問9	もし、あなたが認知症になったとしたら、そのことを周りの人に知ってほしいと思いますか。
問10	認知症の人が近所にいた場合、協力できそうなことはありますか。
問11	認知症に関する相談先について、知っているものはありますか。
問12	認知症施策を進めるうえで、今後充実してほしいことは何ですか。
問13	今後、認知症の人が増えていく中で、どのような社会のあり方が望ましいと思いますか。

問1 今までに認知症の人と接したことがありますか。

- 今までに認知症の人と接したことが「ある」と回答した人は全体の53.6%だった。
- 認知症の人と接する機会の内訳としては、「家族の中に認知症の人がいる(いた)」の割合が24.9%と最も高かった。



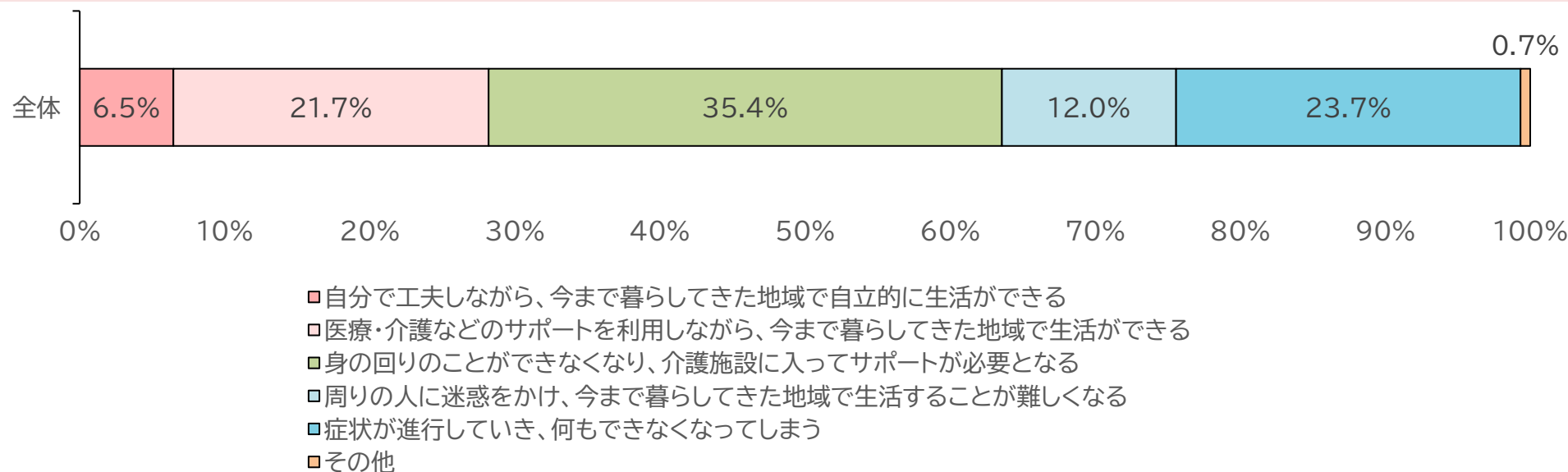
■ 認知症の人と接する機会の内訳（複数回答）



問2 認知症に対してどのようなイメージを持っていますか。

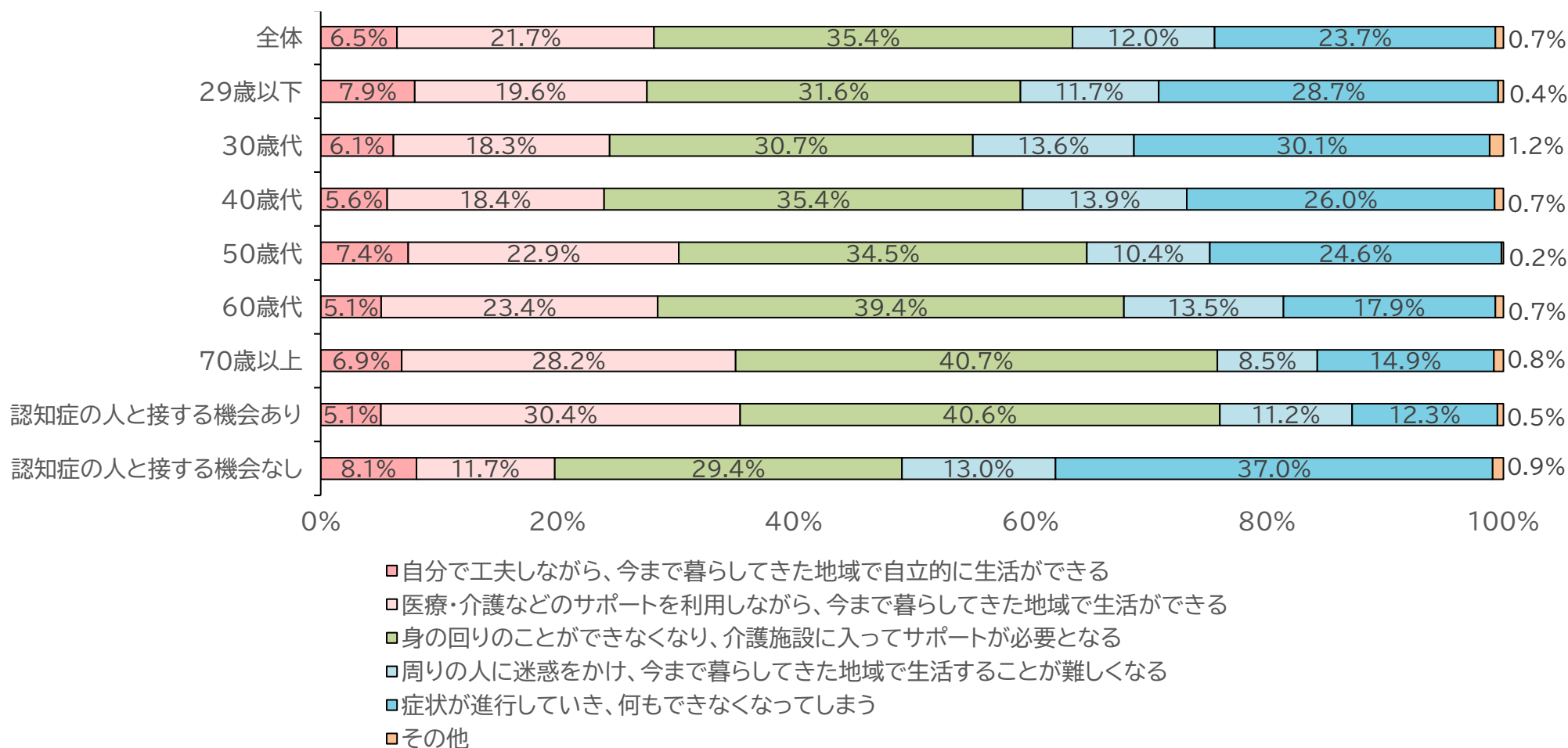
(全体) (単一回答)

- 「自分で工夫したり、医療や介護のサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活ができる」と回答した割合は、全体の28.2%(6.5%+21.7%)であった。
- 認知症の人と接する機会別では、マイナスイメージの「症状が進行していき、何もできなくなってしまう」と回答した割合は、認知症の人と接する機会が「ない」人の方が24.7ポイント高く、37.0%だった。
- 年代別では、年代が下がるにつれ、マイナスイメージが高くなる傾向にあった。(次ページに掲載)



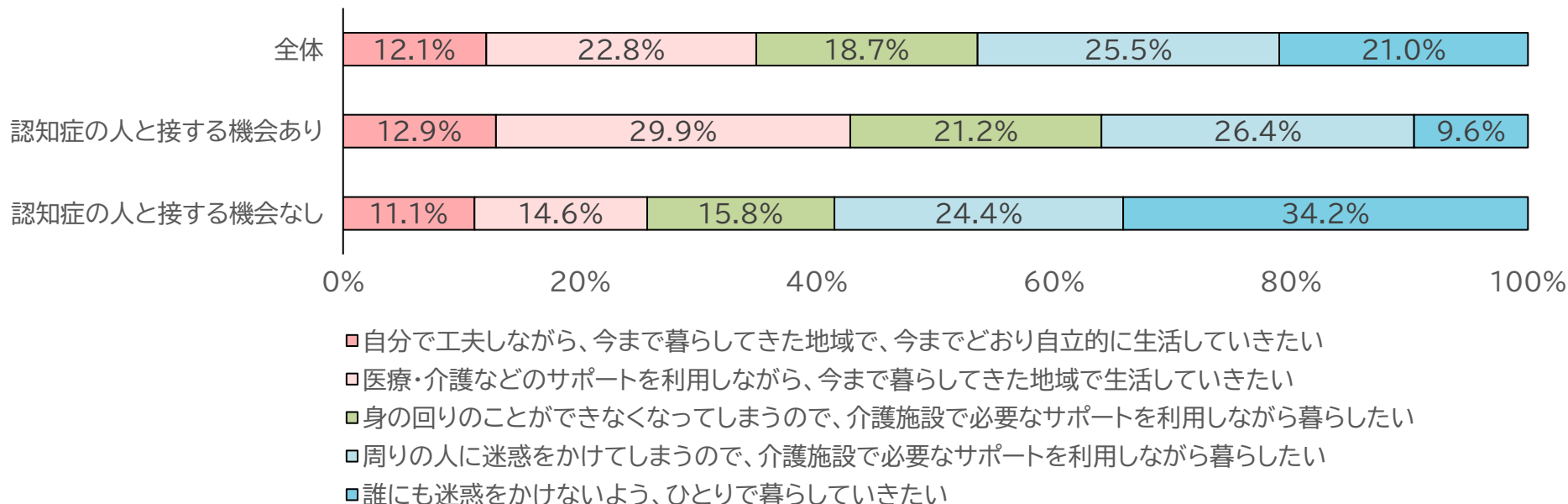
問2 認知症に対してどのようなイメージを持っていますか。

(年代別・認知症の人と接する機会別) (単一回答)



問3 もし、あなたが認知症になったら、 どのように暮らしたいと思いますか。(単一回答)

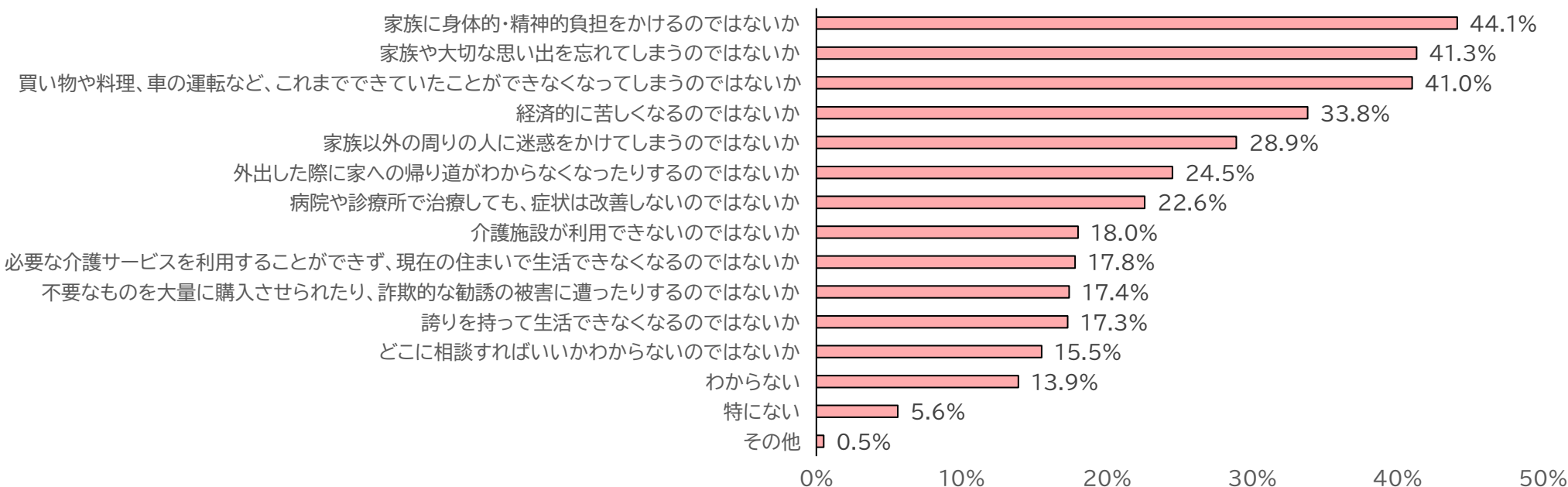
- 「自分で工夫したり、医療や介護のサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活していきたい」と回答した割合は、全体の**34.9%**(12.1%+22.8%)であった。
- 認知症の人と接する機会別では、「誰にも迷惑をかけないように、ひとりで暮らしていきたい」と回答した割合は、**認知症の人と接する機会が「ない」人の方が24.6ポイント高く、34.2%**だった。



調査結果

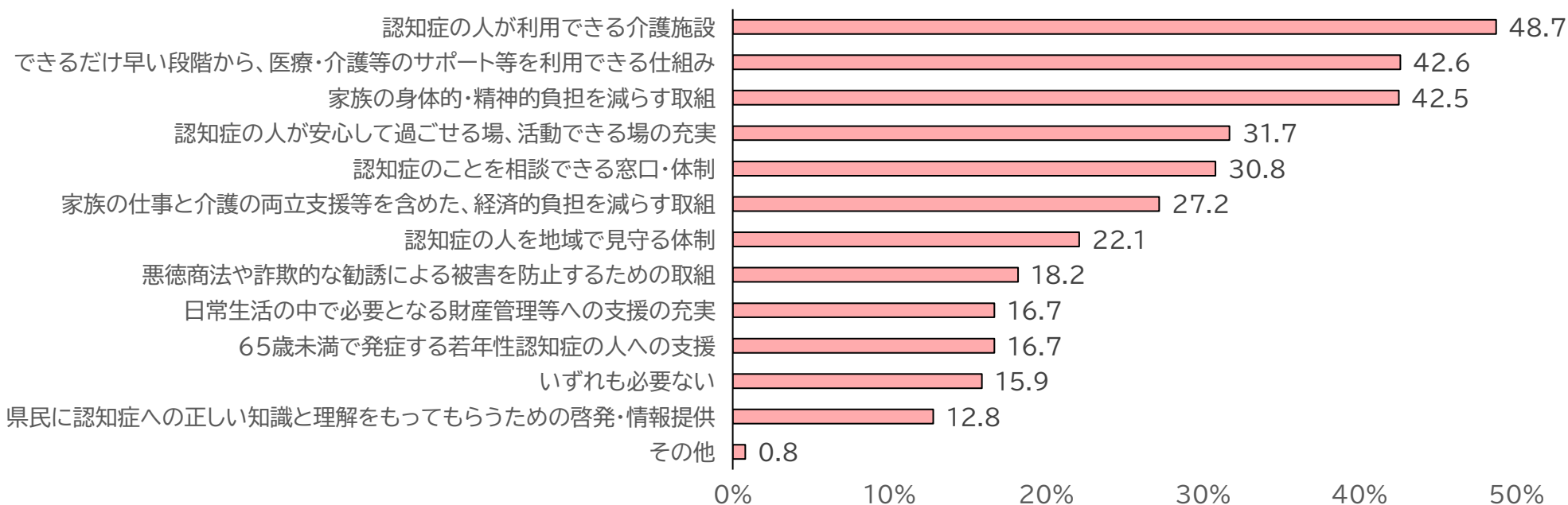
問4 もし、あなたが認知症になったら、 どのようなことに不安を感じますか。（複数回答）

- 「家族に身体的・精神的負担をかけるのではないか」と回答した割合が44.1%で最も高く、次いで、「家族や大切な思い出を忘れてしまうのではないか」の41.3%、「買い物や料理、車の運転など、これまでできていたことができなくなってしまうのではないか」の41.0%だった。



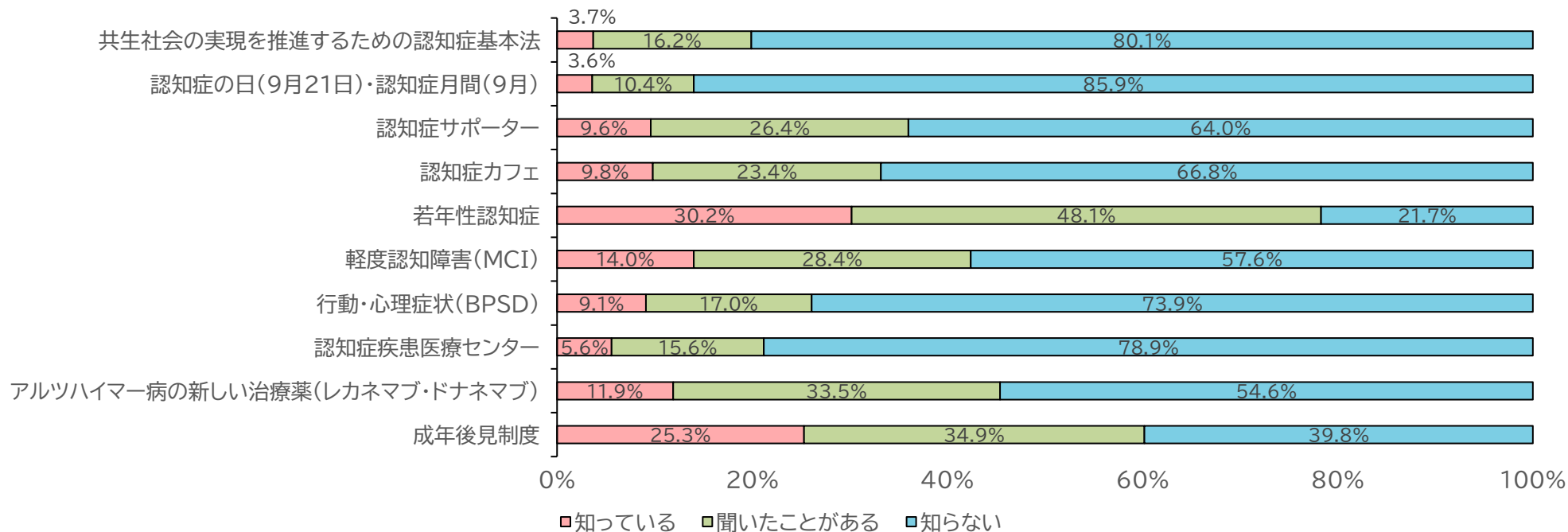
問5 認知症になっても地域で安心して暮らすためには、 何が必要だと思いますか。（複数回答）

- 「認知症の人が利用できる介護施設」と回答した割合が48.7%で最も高く、次いで、「できるだけ早い段階から、医療・介護等のサポート等を利用できる仕組み」の42.6%、「家族の身体的・精神的負担を減らす取組」の41.0%だった。



問 6 次の言葉について、 あてはまるものを選択してください。(単一回答)

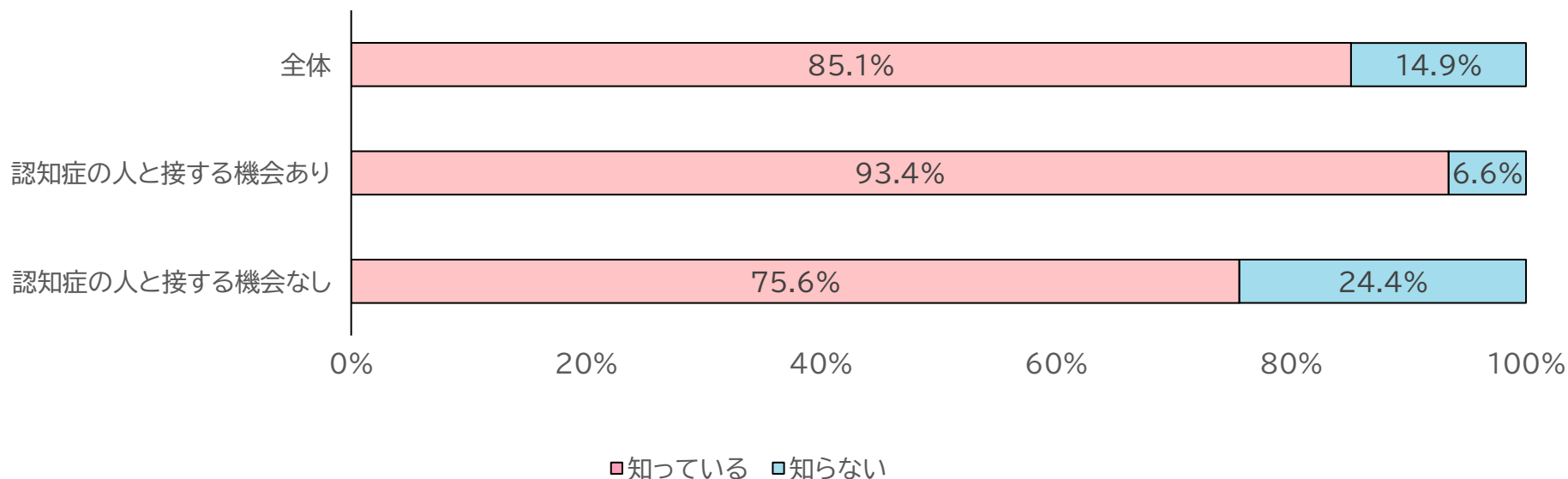
- 「知っている」と回答した割合について、令和6年1月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」は3.7%、「若年性認知症」は30.2%、「軽度認知障害(MCI)」は14.0%だった。



問7 認知症は誰にでもなり得ることを知っていますか。

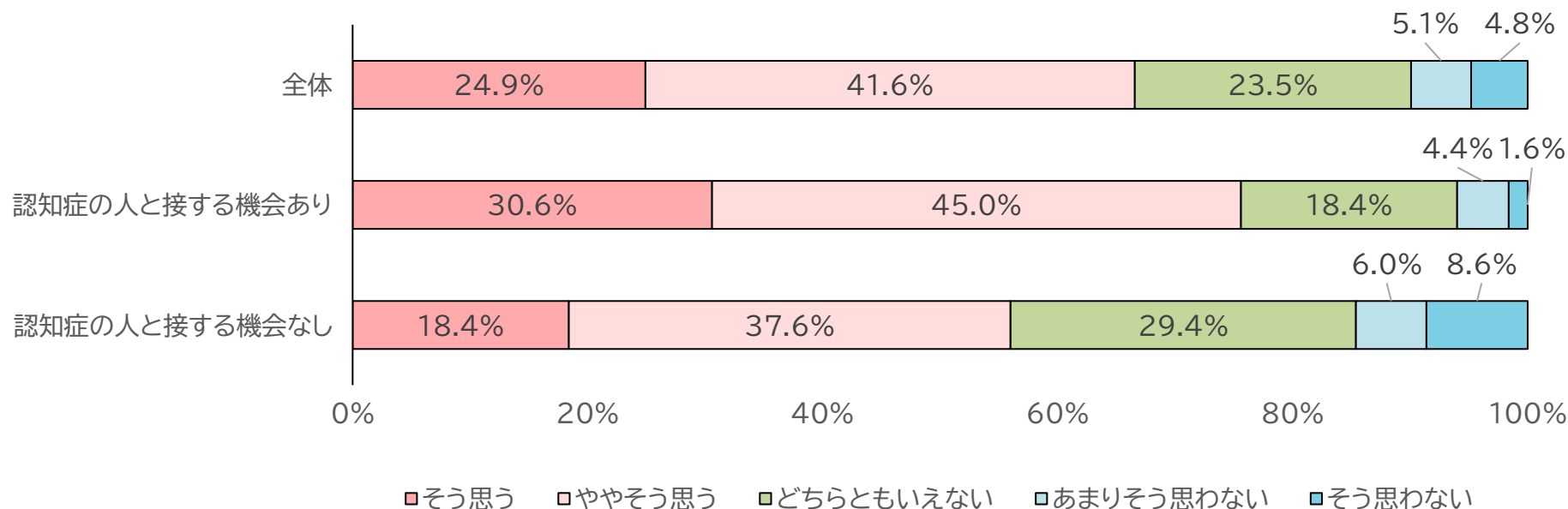
(単一回答)

- 認知症は誰にでもなり得ることを「知っている」と回答した割合は高く、全体の85.1%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、「知っている」と回答した割合は、認知症の人と接する機会が「ある」人の方が17.8ポイント高く、93.4%だった。



問 8 世の中に認知症を理由とした偏見や差別はあると思いますか。(単一回答)

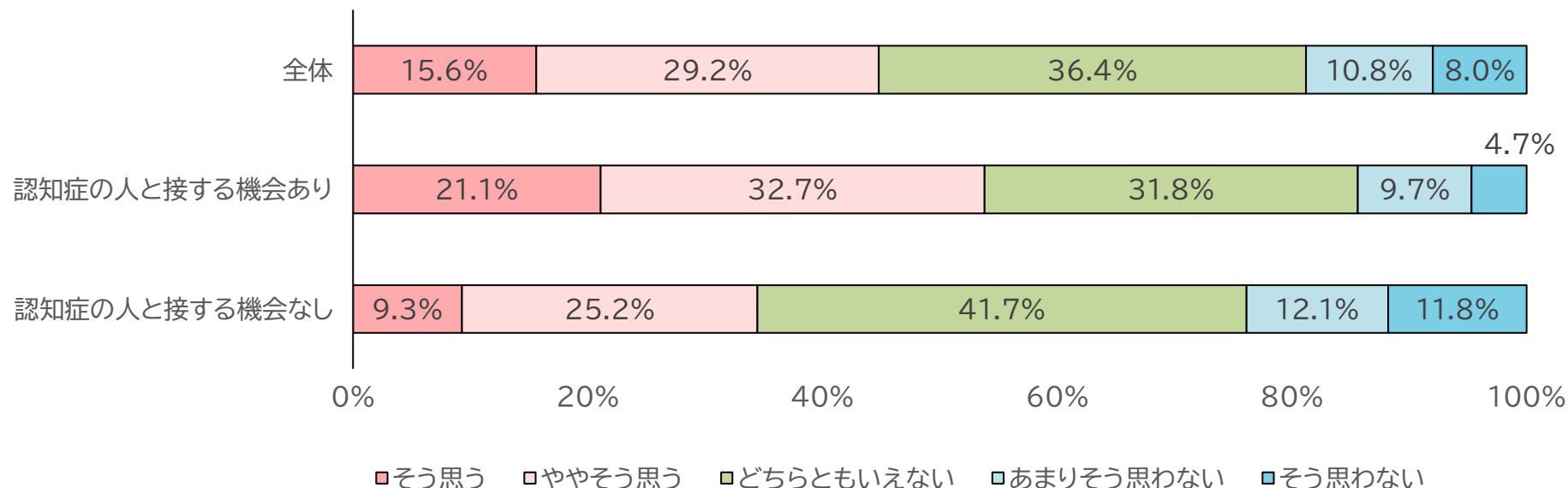
- 世の中に認知症を理由とした偏見や差別が「あると思う(そう思う・ややそう思う)」と回答した割合は、全体の66.5%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、「あると思う(そう思う・ややそう思う)」と回答した割合は、認知症の人と接する機会が「ある」人の方が19.6ポイント高く、75.6%だった。



調査結果

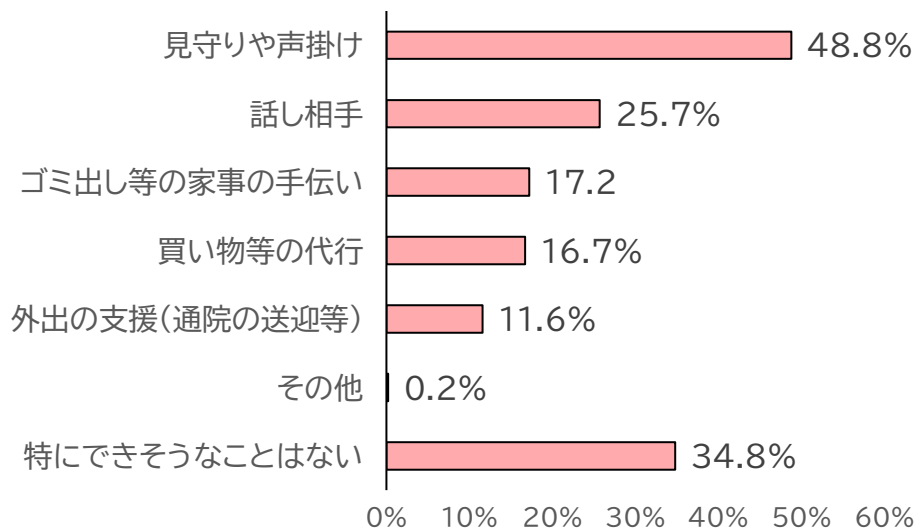
問 9 もし、あなたが認知症になったら、 そのことを周りの人に知ってほしいと思いますか。(単一回答)

- 自分が認知症になった場合、周りの人に「知ってほしい(そう思う・ややそう思う)」と回答した割合は、全体の44.8%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、「知ってほしい(そう思う・ややそう思う)」と回答した割合は、認知症の人と接する機会が「ある」人の方が19.3ポイント高く、53.8%だった。



問10 認知症の人が近所にいた場合、協力できそうなことはありますか。（複数回答）

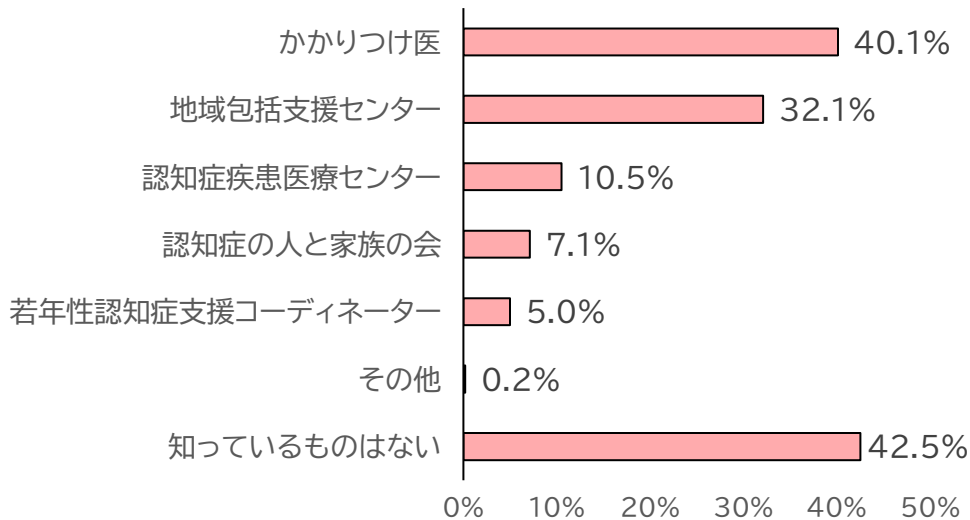
- 「見守りや声掛け」と回答した割合が48.8%で最も高く、次いで、「話し相手」の25.7%だった。
- 「特にできそうなことはない」と回答した割合は、34.8%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、全ての項目（協力できること）において、認知症の人と接する機会が「ある」人の方が、「ない」人に比べて回答割合が高くなっている。



	全体	認知症の人と接する機会あり	認知症の人と接する機会なし
見守りや声掛け	48.8%	58.3%	37.9%
話し相手	25.7%	31.6%	19.0%
ゴミ出し等の家事の手伝い	17.2%	20.9%	12.9%
買い物等の代行	16.7%	20.7%	12.1%
外出の支援（通院の送迎等）	11.6%	16.2%	6.4%
その他	0.2%	0.3%	0.1%
特にできそうなことはない	34.8%	23.0%	48.5%

問11 認知症に関する相談先について、 知っているものはありますか。(複数回答)

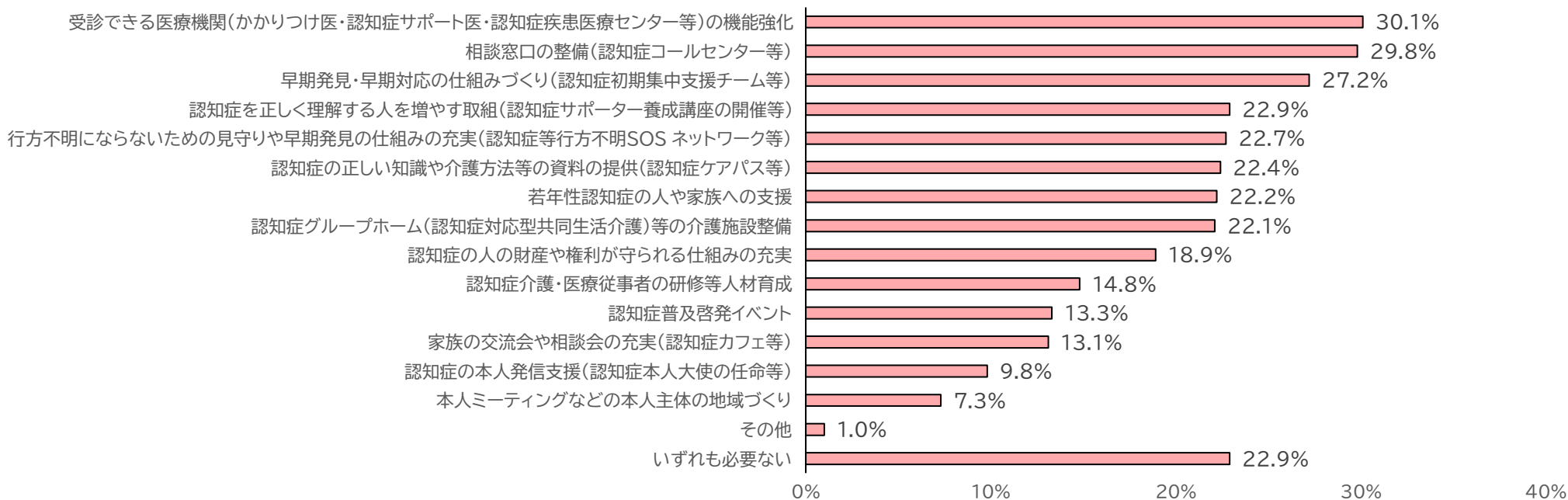
- 具体的な相談先として、「かかりつけ医」と回答した割合が40.1%で最も高く、次いで「地域包括支援センター」の32.1%だった。「知っているものはない」と回答した割合は、42.5%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、全ての項目(知っている相談先)において、認知症の人と接する機会が「ある」人の方が、「ない」人に比べて認知度が高くなっている。



	全体	認知症の人と接する機会あり	認知症の人と接する機会なし
かかりつけ医	40.1%	50.6%	27.9%
地域包括支援センター	32.1%	44.8%	17.4%
認知症疾患医療センター	10.5%	13.9%	6.5%
認知症の人と家族の会	7.1%	10.0%	3.7%
若年性認知症支援コーディネーター	5.0%	7.3%	2.3%
その他	0.2%	0.3%	-
知っているものはない	42.5%	26.5%	60.9%

問12 認知症施策を進めるうえで、 今後充実してほしいことは何ですか。（複数回答）

- 今後充実してほしい施策として、「受診できる医療機関の機能強化」と回答した割合が30.1%で最も高く、次いで、「相談窓口の整備」の29.8%、「早期発見・早期対応の仕組みづくり」の27.2%だった。



問13 今後、認知症の人が増えていく中で、 どのような社会のあり方が望ましいと思いますか。

(自由記述) (複数回答)

- 具体的回答(無回答・特になし・「わからない」を除く回答)のうち、「認知症への理解が広がること」と回答した割合が26.8%で最も高く、次いで、「地域での支え合いがあること」の20.9%、「医療・介護体制や人材の充実」の12.2%だった。

	項目	割合	具体的意見(抜粋)
1位	認知症への理解が広がること	26.8%	◆ 誰にでも起こりうることなので、他人事と思わず考えたい。認知症について正しい知識や対応を多くの人に周知できる機会を増やしてほしいです。 ◆ 誰もが認知症の知識を得て理解できるようにし、認知症の人が身近にいることを周知して、誰もがサポートしていける社会になっていくと、認知症患者を抱えた家族の安心にも繋がる。 ◆ 認知症の方が住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、地域住民全体が認知症について理解を深め、見守りや声かけができる認知症フレンドリーな社会が望ましいと思います。
2位	地域での支え合いがあること	20.9%	◆ 認知症の方を地域で見守れる社会。もし、そうではないかと思われる方を見かけた時には、ためらわず声掛けができるように。 ◆ 周りが積極的に関わりあえる社会。近隣の声掛けの協力と温かい視線。 ◆ 認知症になっても、出来ることは続けて、出来ないことは人に助けてもらいながら、その人らしく生活できる社会。
3位	医療・介護体制や人材の充実	12.2%	◆ 医療技術の進歩や新薬に期待する。 ◆ 認知症の人がなるべく穏やかに生きていける施設が十分な数、整備された社会。 ◆ 認知症の方をみてくれる介護士の方を増やすことが1番大事かと。そのために介護士の方の給料をあげたり短時間勤務ができる、仕事の細分化など、働きやすい職場環境をつくるのが1番だと思う。

調査結果のまとめ



○本調査からわかったこと

認知症に関する基本的な知識・イメージ

- 認知症は誰にでもなり得ることを「知っている」と回答した割合は高く、85.1%だった。
- 認知症になっても「今まで暮らしてきた地域で生活ができる」と回答した割合は28.2%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、マイナスイメージの「症状が進行していき、何もできなくなってしまう」と回答した割合は、認知症の人と接する機会が「ない」人の方が24.7ポイント高く、37.0%だった。
- 年代別では、年代が下がるにつれ、マイナスイメージが高くなる傾向にあった。

認知症に対する偏見や差別・望ましい社会のあり方

- 世の中に認知症を理由とした偏見や差別が「ある」と回答した割合は、66.5%だった。
- 認知症の人と接する機会別では、「ある」と回答した割合は、認知症の人と接する機会が「ある」人の方が19.6ポイント高く、75.6%だった。
- 自分が認知症になった場合、周りの人に「知ってほしい」と回答した割合は、44.8%だった。
- 望ましい社会のあり方としては、「認知症への理解が広がること」と回答した割合が最も高く、26.8%だった。

認知症になった場合の暮らし・不安

- 「今まで暮らしてきた地域で生活していきたい」と回答した割合は34.9%であった。
- 認知症に対する不安としては、「家族に身体的・精神的負担をかけるのではないかと」回答した割合が最も多く、44.1%だった。

充実してほしい認知症施策

- 今後充実してほしい施策として、「受診できる医療機関の機能強化」と回答した割合が30.1%で最も高く、次いで、「相談窓口の整備」の29.8%、「早期発見・早期対応の仕組みづくり」の27.2%だった。

認知症に関する知識の認知度

- 用語の認知度(知っている・聞いたことがある)は、「認知症基本法」は19.9%と低いが、「若年性認知症」は78.3%、「軽度認知障害(MCI)」は42.4%、「アルツハイマー病の新しい治療薬(レカネマブ・トナネマブ)」は45.4%と、比較的高い。
- 相談先の認知度(知っている)は、「かかりつけ医」は40.1%、「地域包括支援センター」は32.1%と比較的高い。一方で、全体の42.5%が「知っているものはない」と回答した。